

『心』

— 永遠の夏休み —

小澤萬記

1 夏という季節

江藤淳も指摘するように、『心』の世界においては、季節が大きな意味を持っている¹。特に重要なのが「夏」である。物語の「枠」をなす、「私と先生」「両親と私」は、夏に始まり、それから2年後の夏の終わりとともに終結する。他方、この枠のなかに組み込まれた「先生と遺書」においては、一巡するよりも繰り返し訪れる夏によって時間が区切られている。

いうまでもなく「夏」という季節は学生（書生）にとって、特別な意味を持つ。「夏休み」という特異な時間として現れるからである。そこで人は日常の時間と離れ、遊びや祭りという非日常的な出来事の中に入り込む。しばしば行われる旅は日常的な空間を離れた移動であり、重要なのは単に物理的に肉体が移動するということではなく、そのことが精神的な移動と帰還という経験を伴っていることである。

このような「夏休み」という特異な時間の記憶はすでに学生ではなくなった人々の中にも強烈に残っているはずである。

そのような目で「私」が「先生」と初めて出会う場面を見てみよう。

私が先生と知り合いになつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達から是非来いといふ端書を受け取つたので、私は多少の金を工面して出掛けることにした²。

そこで、私は一人の西洋人と一緒に海水浴に来ていた「先生」と知り合うことになる。こうして「暑中休暇」という膨大な時間の中で物語りは始まる。「本郷文化圏」の住人である「先生」とその予備軍である「私」が、最初に遭遇するのは、本郷や神田ではなく、鎌倉という両者の生活圏を離れた場所である。それを可能にしたのは夏休みという非日常の時間である。「愉快ですね」と叫ぶ私の傍らで、「ぱたりと手足の運動を已めて仰向になつたまま浪の上に寝」³る先生のすがたは、ほとんど鬱屈を感じさせない。これは、それ以降に描かれる彼の姿とはかなり異なっており、この後の物語においてここでのような先生の屈託のない一面が見られることは無い。

しかし、先生が避暑に行くというのはかなり特異なことだったのかといえばそうでは

ない。私が帰省している夏の間、先生が奥さんと一緒に避暑に行っているらしいことが言及されているからである。先生には、季節がいつであろうと毎日が休日であるのだが、やはり夏は特別な時間であったようだ。この先生の「避暑」と「私」の夏休みが交錯したのが、鎌倉における出会いであった。その最初の出会いの印象は強烈であったが、「鎌倉にいた時の気分が段々薄くなつてき」⁴、日常が戻ってくるにつれ、私は「しばらく先生のことを忘れ」⁵てしまう。これもまた、非日常的な経験の常である。

「夏休み」が重要な役割を果すのは導入部だけではない。物語のなかで、人と人との関係が決定的に変わるのは、あるいは隠されていたものが明るみに出るのはやはりこの「夏休み」なのである。

2 異世界への旅と帰還

Kと先生にとって決定的に重要な夏休みの出来事は二人の房州旅行だった。それまでずっと夏休みは帰省していた先生はこの年初めて帰省せず、旅行にKを誘う⁶。

私は夏休みに何処かへ行かうかとKに相談しました。Kは行きたくないやうな口振りを見せました。無論彼は自分の自由意志で何処へも行ける身体ではありませんが、私が誘ひさへすれば、また何処へ行つても差し支えない身体だったのです。(略)二人はどうとう一所に房州へ行く事になりました⁷。

二人の若者の房州徒步旅行は、現代の若者たちの貧乏旅行とも共通する自分と世界の新発見の旅でもある。

斯んな風にして歩いてみると、暑さと疲労とで自然体の調子が狂つて来るものです。尤も病気とは違ひます。急に他の体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたやうな気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、何処かで平生の心持と離れるやうになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りといふ特別な性質を帯びる風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、又歩行のため、在来と異なつた新しい関係に入ることが出来たのでせう。其時の我々は恰も道づれになつた行商のやうなものでした。いくら話をしても何もと違つて、頭を使ふ込み入った問題には触れませんでした⁸。

房州を旅するKと先生を包んでいる不思議な高揚感（「急に他の体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたやうな気分」）も直接的には「暑さと疲労」から来る肉体的極限状態によるものには違ひない。しかし、そのような極限状態にあえて身を置くことで、二人は日常を離れ「在来と異なつた新しい関係に入ることが出来た」のであって単なる錯覚ではな

い。

「精神的に向上心が無いものは馬鹿だ」という有名な台詞も、このような特異な雰囲気の中で発されるのである。「先生」はその時点ではその言葉に傷つけられたわけではない。これは夏休みという特異な高揚感の中にいる若者同士のお互いに傷つけることも傷つけられることも無いやり取りの中の言葉だからである。

たしかその翌る晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯を食つて、もう寝やうといふ少し前になつてから、急に六づかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事に就いて、私が取り合はなかつたのを、快よく思つてゐなかつたのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だと云つて、なんだか私をさも軽薄もののやうに遣り込めるのです⁹。

こうした出来事を経て二人は旅行から帰つて来る。この時の二人の様子は完全に「修行」「遍歴」から帰還したものの姿である。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つたときは私の気分が又変つてゐました。人間らしいとか、人間らしくないとかいふ小理屈は殆んど頭の中に残つてゐませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも靈がどうの肉がどうのといふ問題は其時宿つてゐなかつたでせう。二人は異人種のやうな顔をして、忙しさうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから両国へ来て、暑いのに軍鶏を食ひました。Kは其勢で小石川迄歩いて帰らうと云ふのです。体力から云へばKより私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

房州から帰還した二人はいわば、「異人」となっている。それは「奥さん」という日常の中に生きる第三者の目を通して明らかになる。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなつたばかりでなく、無暗に歩いてゐたうちに大変瘦せてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫さうになつたと云つて又笑ひ出しました。旅行前時々腹の立つた私も、其時丈は愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久し振に聞いた所為でせう¹⁰。

表面上は房州という近郊への小旅行に過ぎないが、二人の心の中では日常とは異なつた空間への旅であった。「何処かで平生の心持と離れるやうになり」「親しみも憎しみも、旅中限りといふ特別な性質を帯びる風になった」二人はこの後「新しい関係に入ることが出来」るように思える。しかし、「やがて夏も過ぎて九月の中頃から我々はまた学校の課業に出席しなければならないことになり」、日常の時間が戻ってくる。そしてこの日常の中で「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」という言葉が以前とは全く別の意味を持

って繰り返され、それが悲劇へとつながっていくのである。

3 帰省

ここまで、夏休みがもたらすのが、異空間への旅とそこからの日常への帰還という往復運動であることを見てきた。「こころ」におけるこの往復運動には「帰還」という点で異なった意味を持つ「移動」が重要な役割を果していることに注意を払うべきだろう。

「帰省」である。

「帰省」とは異空間（故郷）への旅であると同時にその旅そのものがある種の「帰還」であるという二重の意味をもった運動である。「私」にとっては夏休みは必ずしも故郷に帰るべきときではない。彼が帰省するのは、父親が病気になったという知らせを受けたときくらいである。一方、「先生」にとって「帰省」はまったく別の意味を持っていた。彼にとっては、夏休みとはまさに故郷に帰るべきとき、すなわち、「帰省」の時なのである。

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の目で、懐かしげに故郷の家を望んでゐました。固より其所にはまだ自分の帰るべき家があるといふ旅人の心で望んでゐたのです。休みが来れば帰らなくてはならないといふ気分は、いくら東京を恋しがつて出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思ふその故郷の家をよく夢に見ました¹¹。

当時の「先生」にとって、故郷は都会にいる自分の心のささえであった。叔父のいささかうさんくさい態度によっても、そのような故郷を思う気持ちは、全く揺らぐことはない。したがって、2度目の「夏休み」においても同じように嬉々として故郷に帰るのである。

学年の終わりに、私は又校季を絶げて、親の墓のある田舎へ帰つて來ました。さうして、去年と同じやうに、父母のみたわが家の中で、又叔父夫婦と其子供の変わらない顔を見ました。私は再び其処で故郷の匂を嗅ぎました。其匂は私にとつて依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違ひなかつたのです¹²。

三度目が最後の帰省である。

私が三度目に帰国したのは、それから又一年経つた夏の取付でした。私は何時でも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれ程懐かしかつ

たからです。貴方にも覚があるでせう、生まれた所は空気の色が違ひます、土地の匂も格別です。父や母の記憶も濃かに漂つてゐます。一年のうちで、七八の二月を其中に包まれて、穴に入つた蛇の様に凝としてゐるのは、私にとつて何よりも温かい好い心持だつたのです¹³。

ところが、このような、故郷に対する思いは、叔父の背信によって完全に破壊されることになる。このことが意味するのは、単に信頼していた「身内」によって裏切られたということだけではない。

「先生」にとっての叔父の裏切りの意味を理解するためには「帰省」という行為が明治期の学生にとって一種特別な意味を持っていたことを理解しておく必要がある。この点について、柳田國男は宮崎湖処子の同名の小説¹⁴に関連づけて次のように書いている¹⁵。

「帰省」という本は、理想の細君をもらうというだけのことを書いたものであるが、この中に出てくる「故郷」という概念は、あの自分の若いものの考え方の代表的に表されたものであった。(略) 帰省という思想は、あの時代のごくありふれた、若い者の誰もがもっている感覚で、もっていないものはないといってよいくらいであった。そのころの読者はみな学生で、しかも遠く遊学している者が多いで、みなこの「帰省」を読んで共感したのである¹⁶。

三度目の帰省までの、「先生」の故郷に対する感じ方は、ここで柳田がいう「若い者の誰もがもっている感覚」と同一である。しかも、そこにはいとこ（叔父の娘）という「理想の細君」の候補者まで用意されているのである。

このような「故郷」への思いは普遍的なものであった。その社会的背景について柳田は次のように述べる。

一度世間へ出てしまつた人の故郷觀は、村生活の清さ、安らかさ楽しさに対しての賛歌が先にたち、之に次では後に残つた者の寂寞無聊に対しての思い遣りがあつた。初期の町住居の心細さが、人を久しい間家を懐ふの遊子にして居たのは頗もしいが、斯うして余りにも故郷に重きを置きすぎた結果は、都市はいつ迄もどちら附かずの住民を以って満ちて居た。書生には殊にさういふ人たちが多かつたやうである。彼らが愛読して居た雑誌国民之友は、夏休みで故郷に帰りゆく若い人に向かつて、秋風に乗じて再び上京せよ、田舎を東京化する為に帰る勿れ、東京を田舎化する為に帰れよ、と云つたことがある¹⁷。

「近代化」が進行する中で失われたもの（「清さ」「安らかさ」「楽しさ」）が故郷という理想郷には残つていると観念されていたのである。先に触れた「帰省」にしてもここ

で言及された『国民之友』の帰省キャンペーンの中で多くの読者に受け入れられたものであり、都会と対比した「田舎」を理想化しそこに心のよりどころを求めるものであった¹⁸。すなわち、「帰省」という行為は単なる都会から田舎への物理的な移動ではなく、各人の心の中にある理想郷への帰還という意味づけの中で行われたものであった。

神島二郎は日本の近代化・都市への流入を特徴付けて、人々が背後（故郷）に安心（心のよりどころ）を残した状態で都会に流入してきた点にあると述べている。「故郷と都会との間に往復運動があり、故郷と自分とのつながりが特殊な形で残される」¹⁹ことの一つの結果がこの故郷の理想化であり、「帰省」の聖化なのである。

4 「私」にとっての帰省

他方、「私」にとっては、夏休みに故郷に帰ることは必ずしも自明ではない。彼にとって故郷とはもはや理想郷ではない。故郷や両親はある種の桎梏として現れる。一面で故郷に安らぎを覚えながらも、「私」の気持ちは常に都会へと向けられている。

私は又一人家の中へ這入った。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、何んに暗いなかで何んに動いてゐるだらうかの画面に集められた²⁰。

都会で立身出世をめざす（現実はすでにそうではないが）息子は父親にとって自慢の種である。彼は息子（私）の卒業祝いを郷党の人々を集めて行おうとする。しかしこの父親は他方で次のような感慨を表明せざるを得ない。

「小供に学問をさせるのも好し悪しだね。折角修行をさせると、其の小供は決して宅へ帰つて来ない。是ぢや手もなく親子を隔離するために学問させるやうなものだ」²¹

単に子供の気持ちが、都会に向いているだけではない。子供が高等教育を受けることによって、親子の間に価値観の大きな断絶が生じている。そのことを嘆きながら、他方で父親はそれを受け入れざるを得ない。それが「開化の趨勢」であるという明確な認識はなくとも、地方から都会へという人の流れとそれに伴う社会の変化は押しとどめられないという漠然とした感覚があるからである。

理想郷ではすでない故郷に私をつなぎとめているのは、父親の死病という事実のみである。夏が終わるとともに、私は一度は都会に帰ろうとする。もはや、大学を卒業した私にとって、夏休みもその終わりも存在しないのだが、夏という季節の終わりは、日常への帰還を促すのである。

私は其時又蝉の声を聞いた。その声は此の間中聞いたのと違つて、つくづく法師の声であつた。私は夏郷里に帰つて、煮え付くやうな蝉の声のなかに凝と坐つてゐると、変に悲しい心持になる事がしばしばあつた。私の哀愁はいつも、此虫の激しい音と共に、心の底に染み込むやうに感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かず、一人で一人を見詰めてみた。

私の哀愁は此夏帰省した以後次第に情調を変へてきた。油蝉の声がつくづく法師の声に変わる如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いてゐるやうに思はれた²²。

だが、父親の病気の悪化によって、この「帰還」は妨げられる。そして私が故郷を離れるのは、先生から遺書を受け取り、危篤状態の父を置いて、東京への列車に乗り込むときである。

5 故郷喪失

他方、先生が抱いていた理想郷としての故郷の夢も破綻せざるを得ない。すなわち、三年目にしてやっと「先生」は叔父の不審な行動に疑いを抱くようになる。すると、それまでの理想化された故郷のイメージが一挙に壊れ、その理想郷のイメージの影に隠れていた真実が明るみに出されるのである。

不意に彼と彼の家族が、今までとは丸で別物のやうに私の目に映つたのです。私は驚ろきました。さうして此儘にして置いては、自分の行先が何うなるか分からないといふ気になりました²³。

そのあとの叔父との談判の結果、「先生」は、心ならずも故郷を捨てなければなることになる。「永く故郷を離れる決心を其時に起し」「叔父の顔を見まいと心のうちで誓つた」。そして、それは単に叔父との決別ではなく、父母の眠る「理想郷」からの別れであった。

私は國を立つ前に、又父と母の墓へ参りました。私はそれぎり其墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでせう²⁴。

「先生」の叔父に対する不信感の中に「他者を信頼することができない」という近代社会に普遍的な人間不信を見出すことは可能である。他方で、それは叔父に対する幻滅を通じて芽生えた「故郷」に対する幻滅とも位置づけることができるだろう。都会に生きる人々のこころの中で故郷がいかに変化のない理想郷であっても、それは幻想に過ぎ

ない。現実にそこに生きる人々の生活は、近代化の中で昔のままのどかなものではありえない。それにともなって、人々の心のありようも大きく変容せざるを得なかつたはずである。

町に寂しい日を暮らす人たちに、なんの断りも無く田舎は進んだ。それが東京化では無かつた迄も、少なくとも心の故郷は荒れたのである。それを知らずに帰去来の辞は口ずさまれて居た²⁵。

「事業家」「県会議員」であり、「政党にも縁故」のある叔父が生き馬の目を抜く都会的な行動様式を身に着けていることは少しも不思議なことではなかったのである²⁶。

かくして、「先生」は強い不信感を故郷とそこに暮らす人々にいだくようになる。

「私」に言った「田舎者は何故悪くないんですか」「田舎者は都会のものより、却つて悪い位なものです」²⁷という言葉は彼の深い幻滅のあらわれなのである。

一方「先生」と異なってKは夏休みにも帰省しようとはしない。それは一面彼を特徴付けているストイックな精神の結果であり、他面、親の意思にそむいて自分のやりたい勉強を続けていることが露見しないためでもある。

最初の夏休みにKは国へ帰りました。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと云つてゐました。私が帰つて来たのは九月上旬でしたが、彼は果して大観音の傍の汚ない寺の中に閉じ籠つてゐました²⁸。

しかし、彼は故郷から完全に離れて、都会の人間になってしまったわけではない。都会に出てきた当初の状況は「先生」と変わらなかった。

Kの養子先も可なりな財産家でした。Kは其所から学資を貰つて 東京へ出て來たのです。出て來たのは私と一所ではなかつたけれども、東京に着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。其時分は一つは室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にゐました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合ひながら、外を睨めるやうなものでしたらう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでゐて六畳の間の中では、天下を睥睨するやうな事を云つてゐたのです²⁹。

だが、Kもまた、親から勘当されるという形で、故郷から追われることになる。先生もKもその事情こそ違え故郷とのつながりを完全に絶たれてしまったのである。

「私」の場合はKや先生と異なって、故郷からの離脱を強いられるわけではない。むしろ、彼の場合危篤状態の父の臨終が近い中で、先生の遺書の「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世には居ないでせう。とくに死んでゐるでせう」³⁰という

言葉に駆り立てられるように、東京に向かう列車に飛び乗ってしまうのである。

このように「私」はそれと自覚して父を捨てたわけでも、故郷に背を向けたわけでもない。その後の私がどのような人生を歩むかは、小説の中では全く描かれることがないので、推測を留保するしかない。しかし、衝動的にではあれ、父（故郷）よりも「先生」（都会）を選んだことは重大な選択であり、やはり彼もまたこの時点である種の故郷喪失者になったと考えるべきだろう³¹。

6 結び

Kの自殺の原因となった「寂しさ」について先生は次のように語る。

私は仕舞いにKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路をKと、同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横過り始めたからです³²。

この「寂しさ」の正体について、一般的には近代的個人の寂しさと考えられるだろう。だが、幕末以来の日本の近代化という歴史的条件の中で見て見るならば、それは故郷=共同体から切り離された人間の寂しさに他ならない。それが、自殺した先生とKのみに固有の現象ではなく、先生からメッセージを受け取ることになる私にとっても同様であることはすでに見た。都会に生きる人々にとって、もはや故郷は理想郷ではなく、そこに生きる人々との関係は極めて希薄なものになっているのである。それは、立身出世を目指し、人々が都市へと流れこんでいった「開化の趨勢」の一つの結果であったのかもしれない。

「心」から90年を経て、私たちは今このような故郷からの離脱と、それに伴った故郷の荒廃がさらに決定的に進行した地点に立っている。とすれば、「淋しくつて仕方がない」のは我々現代人すべてを取り巻く状況に他なるまい。

「故郷から切り離された者の孤独」がこの小説のテーマであるとすれば、都会から切り離された故郷がどうなるのかは一つの残された課題である。そのことは都会生活者によってはついに描かれなかつたものであり。それを見据えることはおそらく地方に生きる我々の要求されていることでもあるだろう。しかし、その問題を論じることは小稿の課題を超えている。

注

1 江藤淳「『それから』と『心』」『講座 夏目漱石 第三巻 漱石の作品（下）』、有斐閣、1981、P 136

2 「心」『漱石全集』第九巻、岩波書店、1994、P 3。以下「心」からの引用はページ数のみ示す。

3 P 9

4 P 11

5 P 12

6 帰省の問題は 3 で取り上げる。

7 P 223

8 P 229

9 P 231

この場面でのこの言葉の持つニュアンスは、同じ言葉が日常的な空間の中で発された場面と比べてみると良く分かる。

「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。さうして、其言葉がKの上に何う影響するかを見詰めてみました。

「馬鹿だ」とやがてKが答へました。「僕は馬鹿だ」

Kはぴたりと其所へ立ち留つた儘動きません。彼は地面の上を見詰めてゐます。私は思はずぎよつとしました。私にはKが其刹那に居直り強盗の如く感ぜられたのです。然しそれにしては彼の目遣を参考にしたかつたのですが、彼は最後迄私の顔を見ないのであります。さうして、徐々と又歩き出しました。(P 259)

同じ、「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」であっても、こちらは明確に相手を攻撃する意図を持った言葉であって、権謀術策や欲望が支配する日常的空間の言葉なのである。

10 P 234

11 P 164～165

12 P 166～167

13 P 169

14 宮崎湖処子『帰省』(1890)。

この作品については「帰省小説」(注18参照) という枠組み以外にも様々なアプローチが可能である。例えば、前田愛（「明治立身出世主義の系譜—『西國立志編』から『帰省』まで」『近代読者の成立』1989年筑摩書房）はこの小説を「立身出世主義」の終焉を示すものと位置づけている。

15 ちなみに「先生」は明治 8、9 年の生まれとして設定されており、年齢的にも明治 8 年 (1875 年) 生まれの柳田の同時代人であり、「あの時分の若い者」であった。

16 「故郷七十年」『柳田國男全集』21、筑摩書房、1997、P 133～134

17 「明治大正史 世相篇」『柳田國男全集』5、筑摩書房、1998、P 439

- 18 花森重行は、『国民之友』に拠った徳富蘆峰の「故郷」の観念及びその影響下に書かれた「帰省小説」のイデオロギー性について指摘している。花森重行「反帰省小説としての『帰去来』」『立命館言語文化研究』12、2000年11月
- 19 神島二郎 新版『政治をみる目』、日本放送出版協会、1991、P 18
- 20 P 117
- 21 P 121
- 22 P 125
- 23 P 171
- 24 P 176
- 25 『柳田國男全集』5 P 439
- 26 「そこ（村の「政治」—引用者）にはもはや、よくいわれた『田舎人素朴論』の当てはまる余地はじつはなかった」神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店、1961、P 53
- 27 P 78
- 28 P 203
- 29 P 201
- 30 P 151～152
- 31 水川隆夫は、東京での就職口を見つけられず私は「さしあたり郷里にとどまることに決めた」のではないかと推測している（『夏目漱石「こゝろ」を読み直す』平凡社、2005、P 197）が、その場合でもあくまでも「さしあたり」であったはずである。
- 32 P 291